

## 修士・卒業論文概要

### (修士論文)

村上春樹『女のいない男たち』研究

東海義仁

村上春樹『女のいない男たち』に収録されている各作品は、それぞれ単体での分析が不十分であり、それ故に短編集全体を評価するまでに至っていない。本研究では、各作品を作品論の立場から分析する。また、書き下ろし作品である「女のいない男たち」を、他の五作品の要素が盛り込まれた象徴的な作品であると位置付ける。例えば「ドライブ・マイ・カー」で描かれた〈視点の転換〉は「女のいない男たち」においても見られる。エムの死が、エムの夫と思われる人物から告げられることで、「僕」の視点から転換されたエムを想起することに繋がる。しかし、他の五作品との共通項が存在することは一方で陳腐さを生み出している。その陳腐さは、それぞれの作品におけるモチーフの描かれ方が異なることで補われるため、共通のモチーフのように扱っているか、各作品を繋げて分析することで明らかにする。そのようにして各作品を分析することは、村上春樹の他の短編集と比較するための土台となるだろう。

### (卒業論文)

杉みき子『小さな町の風景』における「風景」

— 中学校教科書教材から

黒田 苑

杉みき子『小さな町の風景』に収録された中の、中学校国語教科書に採用された6作品（あの坂をのぼれば」「遠い山脈」「夜のくだもの屋」「旗」「飛べかもめ」にじの見える橋」）を扱った。作品の物語モデルは、杉氏の経験や身近な人の体験談が反映され、少し設定が変更されて作られている。作中の視点人物が中心風景を見る時に、数ある風景の中から特定のものが取り出される。中心風景を見るという行為が達成されるまでに、この中心風景は視点人物の思いをもって見られていた。さらに、中心風景を見ることに着目して分析すると、この行為の前後において視点人物の心情変化が起きた（あるいは予期される）ことが明らかになった。

## 星新一文学におけるコミュニケーションの諸相

須貝航太

星新一の提示した「未知との遭遇」では、「遭遇するもの」の立場が「遭遇されるもの」の立場に反映される。

「友情の杯」では、「遭遇する」老人が見た「遭遇される」友人の行動や心情に、老人の思考が投影されており、作品中に現れる友人は老人そのものである。「服を着たゾウ」においても、哲学的人間像を持つゾウと生物学的人間像を持つ人間との対立であり、人間の脳内で繰り広げられる「人間観の論争」を可視化したものという点で「自己とのコミュニケーション」である。「繁栄の花」においても、方法の違いがあるものの、相手を蹂躪・制圧しようとしたという点において両者ともに同じ立場である。

SFにおける他者とのコミュニケーションは、他者とのコミュニケーションであると同時に、自己と自己の影とのコミュニケーションであり、星の作品には、他者とのコミュニケーションを通じて行われる「自己の再発見」という大きなテーマが潜んでいる。

## 読み手の違いによる朗読の印象調査

—アナウンサー、教師、大学生の朗読を比較して—

原田香澄

アナウンサーという職業が存在する。その内容は多岐にわたるが、情報を伝えるプロだといえよう。しかし、朗読になるとその理屈は覆されるのではないだろうかと考えた。また、文章を声に出して読む際に、聞き取りやすさや内容理解の程度の違いが人によって異なることに疑問を覚えた。これらのことから、本研究で、職業や性別によって、一番良いとされる読み方を内容理解や聞き心地等の観点から調査することにした。また、それぞれ読み方にどのような特徴があるのかについても調査した。

調査方法として、まず朗読作品の選定を行い、現行の教科書に掲載されている四作品を取り扱うことにした。次に、原稿を作成するための、漢字の読みに関するテストを実施した。これは、読む際に影響すると思われる漢字に平仮名・片仮名・ルビ等の処置をするためである。そして、その原稿をもとに朗読の録音を行った。朗読対象者はアナウンサー男女各一名、小学校教員男性一名、幼稚園教諭女性一名、放送研究会（富山大学にあるサークル）の男女各一名（以後、小学校教員と幼稚園教諭は、教師、放送研究会は、放研とする）である。この後、

作品を更に絞り込むために、インタビュー調査を行い、そして、このインタビュー調査をもとに作成したアンケートを使用し、録音資料を聞かせ、調査を行った。なお、使用した作品は『手袋を買いに』（新見南吉）、『みどり色の記憶』（あさのあつこ）で、漢字の読みに関するテスト・インタビュー調査・アンケート調査の対象はすべて富山大学に通う学生である。

調査結果は以下のとおりである。まず高評価を得た人の読み方に共通する因子として、「会話文で声色が変化している」というものが挙げられた。また、内容理解度の点では、「情景が想像できる」「場面の様子がよくわかる」という二点にデータが集中していた。反対に低評価に多かったのは、

「淡々と読んでいる」「速すぎる」「滑舌が悪い」の三点である。方言やなまりは、読み手と聞き手の出身地が同じであると、好意的に捉えられやすいということもわかった。

次に、職業ごとの、朗読の特徴についてだが、特にこれといったものは挙げられなかった。ただし、アナウンサーは男女ともに教師・放研よりもほとんどの項目で高評価を得ており、アナウンサーは情報を伝えるだけでなく、朗読においても適した読み方をしているのだと考えられる。また、性別については、女性のほうがより好感を与えることが調査によりわかった。

今後の展望としては、今回分かった特徴を意識した読み方を読み手にさせ、どの要素をどの程度意識すれば、より良い朗読になるのかを調査してみたい。

## 中学校国語科教育における

### メディア・リテラシー教育の変遷

—平成期中学校国語科教科書における

新聞を題材とする読み比べ教材を中心に—

池上舞子

新学習指導要領では、情報の扱い方についての記載が充実した。学校教育において情報教育の指導が求められていることがわかる。国語科の教科書では新聞を題材として扱った教材が多くある。新聞を用いて中学校の国語科でメディア・リテラシー教育を行うことができるのではないかと考え、研究のテーマとした。

国語科で行うメディア・リテラシー教育では、情報機器の使い方や情報の集め方を知ることが目的とするのではなく、批判的に読み、それをもとに表現する力をつけることが目的であるのとを明らかにした。これらの力は、新聞の「解説性」という特性に注目し、新聞記事の読み比べをさせることで指導できると考える。

これを生かし、新聞の新たな読み比べ教材では、情報が書き手の意図にもとづいて構成されているということに気付くことができるよう、例えば赤は好意的意見、青は否定的意見として線を引き、読み分けをするという手立てを設けた。また、自分が新聞記事を読み比べて情報の扱いについて学んだことを書く

活動を取り入れた。この2つの活動により、批判的に読む力をつけ、情報の扱い方について学びを深めることができると考える。

国語科で行うメディア・リテラシー教育では、情報機器の使い方や情報の集め方を知ることが目的とするのではなく、批判的に読み、それをもとに表現する力をつけることが目的であるのとを明らかにした。これらの力は、新聞の「解説性」という特性に注目し、新聞記事の読み比べをさせることで指導できると考える。